生徒指導上の問題を持つ生徒に対する学習支援
―中学校と連携した教育デザインの構築―

教育デザインコース　心理学領域
大内　里紗

【目的】

本研究の目的は 2 つある。①生徒指導上の問題を持つ生徒が学び方を体得し、主体的に学ぶための学習環境デザインを共同開発する。②学習環境のデザインを通して、生徒及び教員・支援者の発達をめざすことである。生徒指導上の問題を持つ男子生徒 2 名を抽出し、中学校と大学チームが連携して支援を行う実践とした。

【実践者・方法】

実践参加者について、大学チームは心理発達の教授、附属特別支援学校所属の養護教諭、筆者である大学院生 A、元高校養護教諭の大学院生 B の 4 名で構成された。中学校からは校長、副校長、男子生徒の担任教師が参加していた。

実践協力者について、生徒指導上の問題を持つ 2 年生の男子生徒 2 名を対象とした。P 君はサッカー部に所属しており、饒舌である。Q 君はサッカー部を休部中であり（実践中に復帰）、寡黙である。ともに同じ不良グループの構成メンバーであり、普段から一緒に行動している。

中学校と大学チームの共同研究という名目で、協力者 2 名も研究者の一員とし、彼らにとって必要な教材や人材といった支援・指導は何かを共に話し合うオープンダイアログ形式 (Seikkula and Olson, 2003) を採用した。

【実践報告】

実践は 2015 年 10 月までに 5 回が終了しており、続行中である。今回は初回面接から 5 回目の中間面接まで報告したい。

(1) 初回面接について

初回面接では協力者の「1 年生のときに友人と流れでグレた」という発話があった。また、授業エスケープの原因として、隠れ場所の存在や授業が分からないなどの問題があがった。これらより、生徒指導上の問題の発端は個人内要因だけでなく、授業や学校の物理的環境・友人関係などの社会文化的環境の要因もあると考えられる。また、面接の中で協力者は自身の行動を振り返り、状況や感情を分析することが可能であることが分かった。さらに、この支援では「学校的でないこと」を通じて学習の仕方を学ぼうとしていたが、協力者の要請により、「学校的であるもの」を実質化する方向に変更した。

(2)5 回目・中間面接について

中間面接までに 2 名とも授業エスケープと暴力行為はなくなっており、生活は安定していた。P 君は部長になり、「部長として認められるために生活習慣を改めている」と発言するなど、周囲の人物からの評価を気にする言動が見られるようになった。また同時に、自身の振り返りに客観的な視点を持ち始めていた。Q 君は部活に復帰し、それがきっかけで「自分は変われた」との発言から、自己肯定感の向上が見られた。また、以前よりも学校の勉強について気にするようになったと述べていた。

これまでの実践の中で 2 名の考え方や学習・生活状況に変化が出てきた。支援体制を協力者別に工夫する必要があると考えられる。協力者の変化を望むだけでなく、授業や支援の在り方も状況によって成長させ、実践の「場」としての成長を図りたい。

【実践のまとめ】

Holzman(2014) は、発達は道具と結果の弁証法 (tool and result) であると述べている。しかし学校文化の中では、発達はプロセスではなく、結果としての数値であるという見識があるのではないだろうか。本実践から発達とは、学習者に可視的な評価のための知識や理解を求めることではなく、教え手と学習者の弁証法的な変化のプロセスを含む環境や組織の変化であるという捉え方を提案したい。